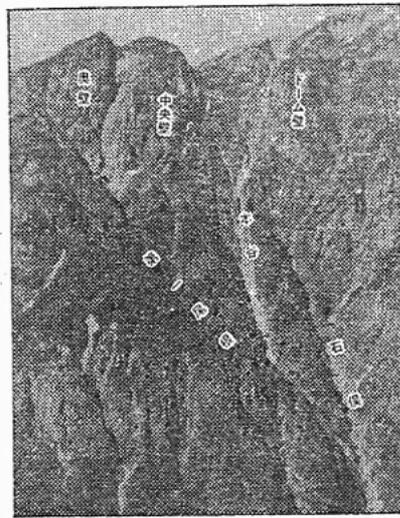


# 笠ヶ岳穴毛谷二ノ沢の岩場 ①

登山倶楽部・岐阜

笠ヶ岳の東面にはまだ未知の岩場が残されている。穂高の滝谷と蒲田川を挟んで対峙する穴毛谷二ノ沢は、滝谷とほぼ同等のスケールをもち、穂高の好展望台に位置している。われわれは数年前から二ノ沢に目標を定めて、ルート開拓を進めてきた。現在は七ルートの開拓にとどまっているが、一定の成果をあげたものと目負し、中間報告の形で発表する。



## 〔はじめに〕

笠ヶ岳の岩場はかなり以前から登山の対象とはされてきたが、アプローチが一般的でないことや、登山ルートが大半を占める四ノ沢と二ノ沢の地形が複雑なことなどの理由で、限られた人たちに登られているに過ぎない。私たちは穴毛谷の各岩場の中でも最も未知の部分を残している二ノ沢の岩場に注目し、その概念の把握とともに新しいルートの開拓に取り組んだ。その結果、昭和五十四年以来七ルートの

開拓に成功すると同時に、複雑な二ノ沢の概念をほぼ把握することが出来たので、とりあえず中間報告の形で発表する。

しかし、まだ全体からいえば半分程度の岩場しか登攀していない上に、肝心の冬季登山を一度も試みていないので、それらを今後の研究課題としたい。

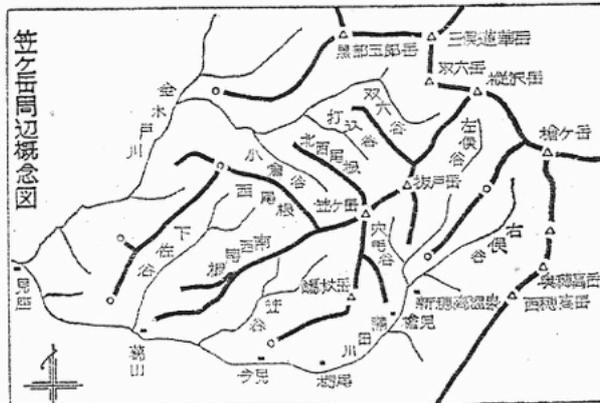
## 〔登山史〕

二ノ沢の岩場が本格的に登られたのは昭和三十年代の後半からで、中央ルンゼと奥壁（左峰岩壁）、中央壁（右峰岩壁）の各ルートが昭和三十九

年頃に山窓会と大阪山の会によって相次いで登られた。最初は左俣林道からもよく見える中俣周辺の岩場が対象とされ、その後右俣の岩場、前衛壁などがポルトを用いて登られている。

冬季は、報告されている記録上から一九六四年三月三十日～四月一日にかけての山窓会パーティーによる中央壁（右峰岩壁）、一九七九年十二月三十日～三十一日に神戸登山倶楽部パーティーによる中央ルンゼの二登山が認められるだけである。

なお夏、冬ともに詳細な登山月日およびメンバーについての資料は残念ながら

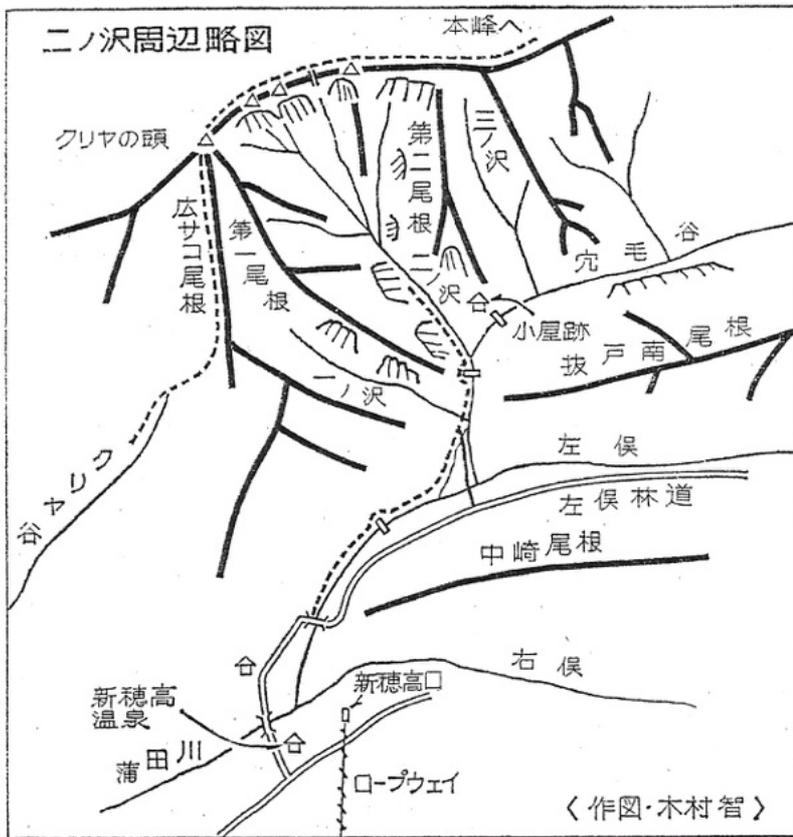


笠ヶ岳周辺概念図

から私たちの調査では一部を除いてはつきりしないため、それらの資料をお持ちの方がございましたらぜひ一報ください。

## 〔二ノ沢の概念と岩場の名称〕

二ノ沢の各岩場、ルンゼの名称については従来統一されていなかったし、不合理かつ長い固有名称が使われていたので、それらをすっきりとした形に統一した。ただし一般化されていた部分や変えると混乱を起さすと思われる



部分はそのままとした。なお、仮称名の下に( )で呼んでいるのは旧名称である。新しく命名したものは「」で表した。

二ノ沢は第一尾根と第二尾根とに挟まれた沢で、左俣林道から見ると抜戸岳南尾根の末端付近から正面に見えるのがそれである。穴毛谷第一砂防堰堤の上が出合で、右に第二尾根左尾根、

左に第一尾根末端壁が位置している。出合から約二〇〇で「出合ノ滝」が現れ、左、中、右俣の合流点となっている。右俣はそのまま直上している沢で、途中二つの大きな滝を越してどんどん詰めると岩壁に突き当たる。正面右のハングとスラブを連続させている大きな壁が「あけぼの壁」、その左端に灰色のハング帯を持って突っ立っている

岩塔が「ドリュ状岩壁」である。さらにその左手にはスケールは小さいが「ルンゼ状岩壁」があり、全体で幅四〇〇、高距二五〇の堂々たる岩場を構成している。

本谷(中ノ右俣)は「出合ノ滝」から左手の沢に入り、大きな岩小舎「登攀ノ宿」を過ぎて約二〇〇で行った所から右手に一直線に主稜線まで突き上げていく広くて大きな沢である。途中に二つの大きな滝があり、上部は草付となって消えている。この沢の左手には二ノ沢の盟主というべき合形状の大岩壁「中央壁」(右峰岩壁)、右手上部には「ドーム壁」があり、南面と東面にそれぞれフェイスを持っている。中央壁は幅五〇〇〜六〇〇、高距二〇〇。またドーム壁は幅四〇〇、高距一五〇のスケールを誇っている。

中俣(中ノ左俣)は本谷から左に分かれる。途中第一尾根に突き上げる「前ルンゼ」を見送ると、滝が連続して廊下状のゴルジュ帯となって、ここを過ぎると三つのルンゼの合流点に達する。左からAルンゼ、Bルンゼ、さらに右壁に直接食いこんでいるのを中央ルンゼと呼ぶ。この周辺の岩場としては、A・Bルンゼに挟まれた「キバ岩」、Bルンゼの右手に三つのピナク

ルが連続する「ピナクル尾根」、中俣最奥で、中央ルンゼ左壁にあたる「奥壁」(左峰岩壁)がある。このうち最大のスケールを有するのは奥壁で、幅二〇〇、高距二〇〇を有している。

左俣は登攀ノ宿の手前から左へ分かれていく沢で、上部で左、右俣に分かれてそれぞれ第一尾根へ消えている。入口と最上部に岩峰があるが、登攀の対象とするほどではない。

### 「岩場の状態」

右俣周辺の岩場はドリュ状岩壁上部にやや脆い部分があるのみで全体的には固い。ただ、あけぼの壁の左側はブッシュと草付が見受けられるので処理に慣れていないと苦戦するかも知れない。岩質はかなり固く、ポルト打ちはあまり楽ではない。

ドーム壁は、東壁は固くスッキリしているが中間リッジ周辺は草付が多く、しかもかなり悪い。また南壁は凹角やクラックが多く、短い割には楽しめる場所である。

中央壁は右フェイスを除いて草付やブッシュがなく、しかも全体的に固く快適なルートが多い。

中俣周辺の岩場ではキバ岩の一部に



二ノ沢周辺概念図

やや脆い部分があるのみで、全体的には草付があまりなくて岩も固い。なお各ルンゼ合流点付近には八月中旬頃まで雪渓が残ることがある。またゴルジュ帯から上では降雨に要注意。

「アプローチと下降路」

まず出合ノ滝までは、蒲田川左俣を穴毛谷合流まで林道を辿り、穴毛谷を溯行して二ノ沢へ入るか、あるいは左俣右岸の樹林帯の道を進んで穴毛谷に

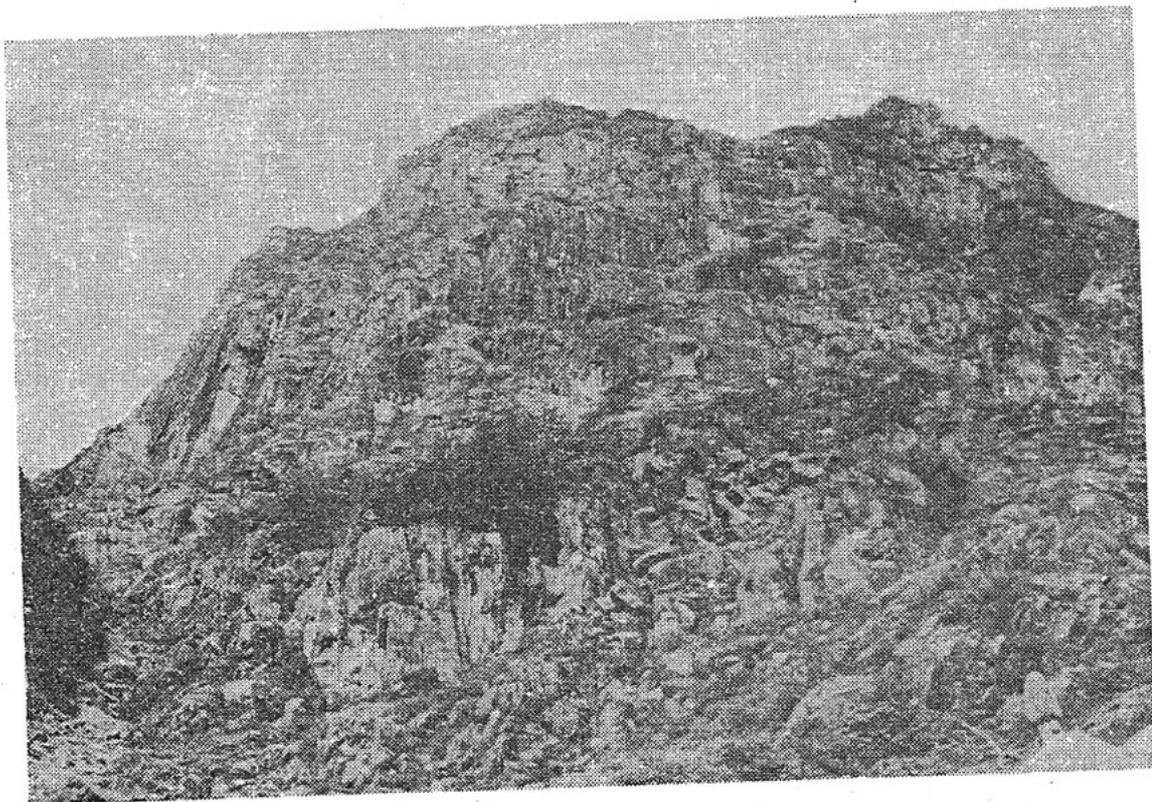
入るかのどちらかであるが、前者の方がわかり易くて速い。新穂高から穴毛谷出合まで約三〇分、穴毛谷出合から二ノ沢出合まで三〇分、さらに出合ノ滝まで約一時間である。なお穴毛谷に入ってから最初に現れる沢は一ノ沢であるので、間違っに入らないようにしたい。堰堤を越えてから左へ上がっているのが二ノ沢である。

右俣の各岩場へは出合ノ滝から約一時間で取付点に達するが、途中に二〇坪の滝と三〇坪のナメ滝があり、前者は右岸をフリー(Ⅲ級)で登るが残置ハークンもある。ナメ滝は右岸に入っている小沢を少し登ってから大きく巻いて落ち口上へ出る。また、本谷側から中間尾根のコルを越えて取付手前へ出る方法もあるが、右俣への下りが悪く、特に目的がある場合以外にはあまり勧められない。

本谷周辺の岩場へのアプローチは、出合ノ滝から二〇分で中俣との分岐に出、さらに約三〇分詰めると左手へ犬歯状ルンゼが分かれている。これを詰めると犬歯状ピークとのコルに至り、中央壁のカンテ状ルートを取付に出る。さらに途中から右上する浅いルンゼを詰めれば、中央壁正面の草付バンドに出、大スラブルート、凹角状ルート等に取りつくことが出来る。

「キャンプサイト」

二ノ沢の中でキャンプサイトとなるのは三俣にある「登攀ノ宿」と呼ばれる岩小舎だけである。ここは上、下段に分かれていて合計七～八人は楽に泊



立ヶ岳中央壁

まることが出来て快適であるが、降雨時には浸水の恐れがあるのが難点である。この岩小舎以外では無理に求めたとしても、沢筋のガラ場を整理して二人三人が寝れる場所を作るのが精一杯である。しかもひと冬が過ぎれば雪崩でなくなってしまうのは必定である。参考までに私たちが経験した場所を挙げると出合ノ滝左岸のガラ場、本谷中間部犬歯状ルンゼ出合付近のみであり、それ以外は岩壁の中でのビバークばかりである。

冬季のキャンプサイトとしては二ノ沢出合右手の旧穴毛小屋跡がある。ここ以外に沢の内部にそれを求めることは自殺行為に等しい。つまり、滝谷出合からの登攀と同様、ラッシュで取付へ達する必要がある。

### 〔冬季の状況〕

冬季の二ノ沢は東面の岩場が皆そうであるように積雪量が多く、その上に上部に広大な草付帯が存在するので非常に雪崩の危険が大きい。従って登攀計画を立てるには二ノ沢全体の概念をしっかりと把むことがまず必要となる。

一般的に言って最も警戒を要するのは本谷と右俣である。中でも本谷は上

部に多量の吹き留まりが出来るのでその規模が大きい。従って末端から登る場合は冬季の沢登攀の常識、降雪中および直後の入谷は勿論、日の出前に危険地帯を抜けているなどの鉄則を守るべきである。

各ルートのアプローチであるが、まず出合ノ滝まではまともに詰めるより方法がない。そしてここからの各岩場へのアプローチを出来るだけ尾根筋に取るようにする。右俣とドーム壁は中間尾根を登り、右俣へは右へ横断して取付へ、ドーム壁へはそのまま尾根を登れば取付へ出られる。ただ、ドーム南面への取付は、いったん本谷へ入らねばならないので要注意である。中央壁へは本谷、中俣の合流点から横断バンドへ上がっている支尾根を詰める。そして、横断バンドを利用して各ルートの取付へ出る。中俣は下部から詰めるより方法がないが危険は最も少ない。

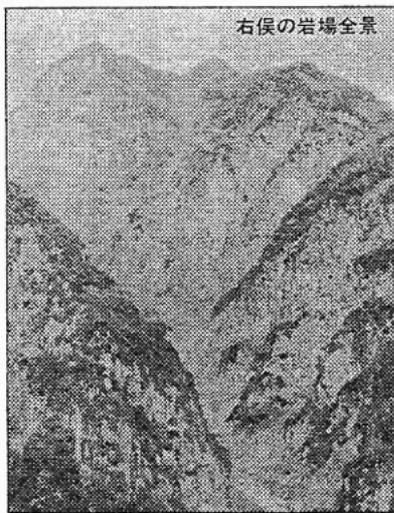
なおドーム壁と中央壁は主稜線から下降して岩壁基部をトラバースすることも可能である。終了後はいずれも主稜線に出てからクリヤ谷道を下ることになる。タイムは状況によって大きく変わるが、滝谷を登る場合の一・五倍ぐらいいは見込む必要がある。

(文責・木村 智)

# 笠ヶ岳穴毛谷二ノ沢の岩場 ②

登攀倶楽部・岐阜

穴毛谷の岩場の中でも二ノ沢右俣はもっともスケールが大きい。にもかかわらず、かつてほとんど記録をみなかった。一九七九年八月、われわれはこの忘れられた岩壁に挑み、いくつかのルートを拓くことができた。蒲田川をはさんで対峙する穂高の岩場とは対照的に、人の手垢をしらぬ岩肌は、他では得られぬ新鮮な喜びをわれわれに与えてくれた。



右俣の岩場全景

## 「岩場の概要」

右俣の岩場は二ノ沢で最大の岩壁があるにもかかわらず、本格的に紹介されたのは今回が最初と思われるほど一般的には知られていない。したがって岩場の名称なども全て私たちの仮称である。

右俣の岩場の中で最も見栄えがするのには「ドリュ状岩壁」である。ここは岩塔が一直線に空に向かって突き上げており、誰が見ても登攀意欲をそそられる。既登ルートは岩塔左下のフェイ

スから左壁に抜けており、核心部を大きく外れている。

私たちの開拓したルートの「あけぼの壁」との間にあるルンゼは、「あけぼの壁」の間に至り、ハング帯下部を左上気味に横切る「左上ルート」と、下部フェイスから岩塔を一直線に登り、最後は右側のジエードルを抜ける「ダイレクトルート」の二本である。

この中で困難なのはダイレクトルートで、核心部の前傾ハング帯は三ピッチで一〇以上の張り出しを持っているし、岩塔上部の振りトラバースなど多彩なルート内容を持っている。

ドリュ状岩壁の左壁には高距は短い、三つのルンゼを持つルンゼ壁があり、右側から二ルンゼ、三ルンゼ、四ルンゼと呼んでいる。このうち二ルンゼは既登であるが、三、四ルンゼは残置ハーケンを見かけなかった。私たちが開拓した「中央ルート」は、二ルンゼの二P目の途中から左のフェイスに入って直上するもので、フリー主体の短いルートである。

右端にあるあけぼの壁は現在までのところ試登の域を出ていないが、東面は明るいスラブとハングの連続する高距二五〇以上の、ザイルピッチにして一五



笠ヶ岳周辺概念図

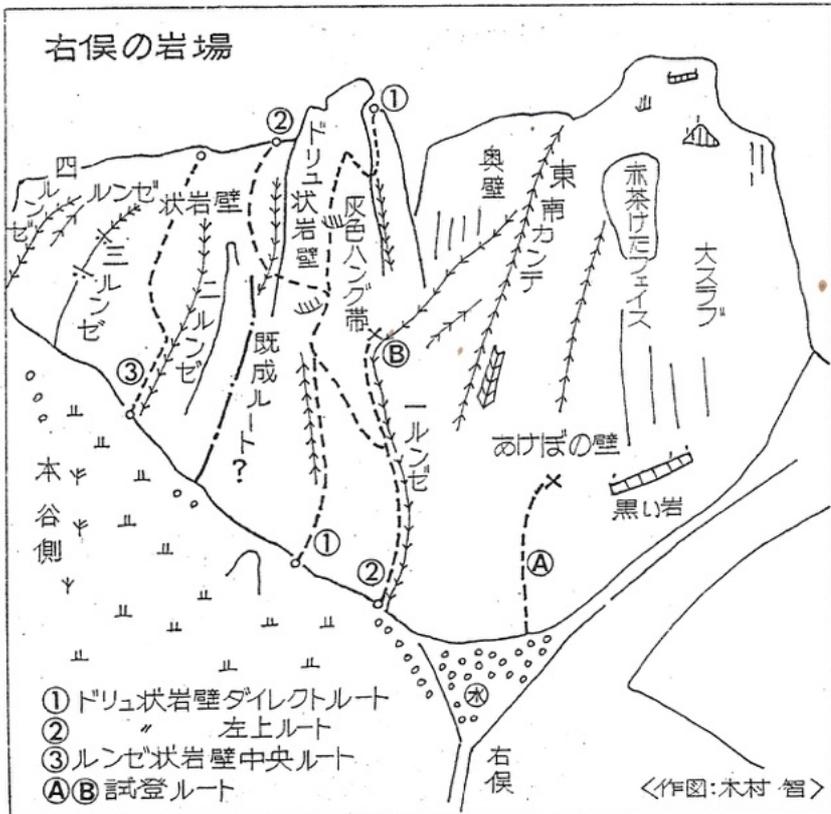
Pに達しようかという、素晴らしい壁である。また、ドリュ状岩壁側はブッシュと草付の多い雑然とした壁となっており、左端には一ルンゼとその最上部に奥壁が控えている。この壁は私たちにとっては次の目標となっているが、なぜか雨にたたられて敗退を重ねている。ルートの可能性としては、左端の一ルンゼから奥壁へ抜けるルート、東、南面を分けるブッシュと草付混じりの東南カンテなどが比較的易しく、東面の大スラブとハングの連続する壁は人工の要素が多く、開拓に時間がかかり、

最後まで残されられると思われる。

### 「アプローチと下降路」

右俣のアプローチは第一回(前号)で紹介したが、再度詳しく解説する。出合ノ滝を過ぎて真っ直ぐに上がっているのが右俣で、数個の小滝を越え

てゆくと約二〇分で落差二〇以上のチョックストーン滝にぶつかる。登路は左壁にあり、フェイス状を右上気味に登るとバンド状に出てここを右ヘトラバースすると落口に出る。ザイル無しでも登れるが、グレードは三級上ぐらいなので初心者同行の場合は使用すべきである。ここを過ぎると右手に赤い岩



〈作図:木村 智〉

壁が現れ、約二〇分で第二の滝、三〇分の滑滝に出合ふ。ここは左手(右岸)を大きく高巻くことになる。まず左手の小沢に入り、三〇分ほど詰めてから段々状の岩場を右上気味に登るが、取付が草付になっていて少々いやらしい。滑滝上からは問題となるような所はなく、出合ノ滝から約一時間で沢の源頭、すなわち取付点に至る。

登攀終了後の下降路は大きく分けると二つある。一つは第二尾根の稜線を辿ってドーム壁の頭へ抜けて主稜線に達するもの、次に第二ルンゼ上部のブッシュ帯をドーム壁寄りに横断して三ルンゼをアプザイレンで下降する方法がある。登攀の充実感を求めるなら前者だが、主稜線まで一時間半〜二時間ぐらいかかる。三ルンゼ下降は四回のアプザイレンで基部に降り立つ。所要時間は一時間。

### 三本のルート開拓

#### ●ドリユ状岩壁左上ルート

一九七九年八月十四日

パーティー——木村智、田口健二

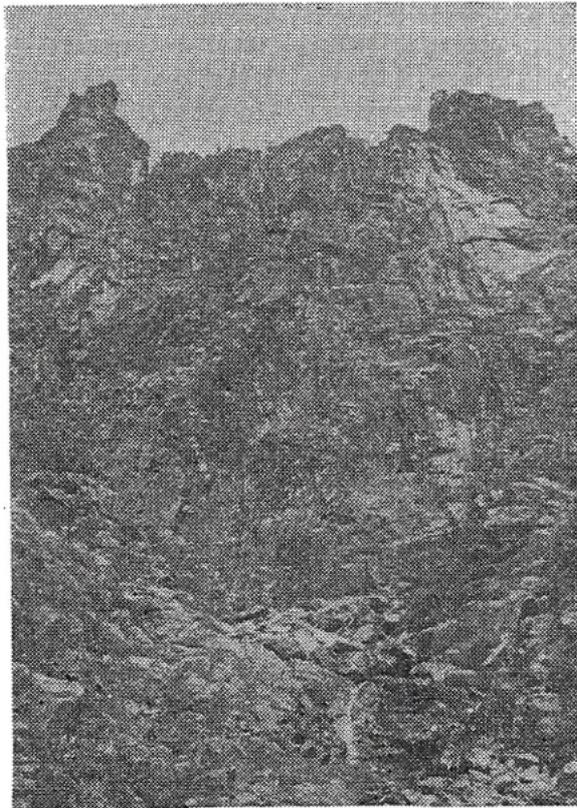
出合ノ滝を過ぎて二〇分のチョックストーン滝を越え、あたかもモンタンベールから

のドリユを見る思いがした。岩塔の上部は非常に威圧的で、大オーバーハングを形成し、いつかはダイレクトに登りたいという欲望がわいてくるが、よほどの心の準備が必要とされそうなるルートである。

取付で大休止をしてルートを検討するが、心は易しい方へとどうしても傾き、右手のあけほの壁との間に食い込んでいるルンゼに眼を付けた。

一P目は小垂壁からルンゼに入って左上し、易しい岩場をザイルいっぱいまで登る。二P、段状フェイスからチムニーに登り、出口を左ヘトラバースした所でザイルが尽きて不安定なピレイとなる。ここはかなり悪い。三P、頭上の小フェイスを越え、草付となり、どんどん登るとやがて傾斜の緩いカンテが現れた。このカンテは簡単で、すぐに切って取ったような大テラスに着いた。

大テラスで小憩後、いよいよ核心部の岩塔の登攀に取りかかる。ルートはテラスの右端からで、細かいクラックを少し登り、ピレイ用に厚手のハーケンを打って、岩の突起にシュリンゲを引っ掛けてアプミを吊る。ここからいよいよポルト打ちとなって三本ほど固い岩に苦勞して連打。最上部のポルト



ドリユ状岩壁とあけほの壁

トにアブミを吊ると振り子で左手のバンドへ移れそうだがなかなか思い切った行動がとれず、岩の割れ目に手を突っ込んでぶらさがるようにしてやっとバンドに移った。ここで不安定な体勢のまま左手でハーケンを打ってアブミを吊り、念のためにすぐ上にもう一本打って二個のアブミに体重を分散させる。このあたりは完全なハング帯で体は宙に浮き、ボルト打ちは苦戦を強いられ

ることができず、ハング右上にもう一本ボルトを打って松の枝を引き寄せてホールドとし、やっとテラスに入る。このピッチでボルト六本、ハーケン五本を使用。いずれも残置した。セカンドを上げて今後のルートを検討する。頭上は大ハング帯が空に向かって突き上げていて登る気は起きず、岩塔の左手のルンゼを隔てて、スカイラインを形成するカンテを目指す。通算五P目、ボルトを連続五本連打すると滝の落口のような所に出て傾斜が緩くなった。二〇桁ばかりザイルが延びただけだがピッチを切る。六P、

左手の凹角に入り、ここを抜けてカンテに出ると視界がひらけて上はフェイス状となっている。快適なクライミングが続いて四〇桁いっばいザイルを延ばしたところで不安定なビレイを行う。七P、岩の層が縦に入って登りづらいフェイスをフリクションで登るがランニングビレイが取れず、適度に緊張した登攀となる。登っていて剣岳の八ツ峰六峰Dフェイス富山大ルートの岩層を思い出した。ビレイ点は脆い岩であり、あまりハーケンが効かず、不安な気持ちでセカンドを迎える。八P、最後のピッチを田口に任せたが、脆いフェイスと草付を二〇桁でブッシュに着いて終了の合図がある。続いて終了点に達してガッチリと完登の握手を交わす。一日で完登できてヤレヤレという感じで大休止を取る。終了は一六時。

帰路は草付とブッシュ帯を左へ約二五〇桁トラバースし、庭園のような所に出たところから三ルンゼへ向かってアブザイルンを行う。合計四回ほど、支点を作りながら下降を繰り返すと岩壁基部へ降り立った。そこからは登路を逆に辿り、第一の滝はアブザイルンを行って出合ノ滝B・Pへ。

〔タイム〕出合ノ滝(七・〇〇) 基部(八・〇五) 八・三〇) 終了点(一六・〇〇)

下降点(二七・三〇) 出合ノ滝(二八・二〇)

〔後記〕

このルートはドリユ状岩壁の核心部を右から左へ横断するルートであり、ドリユ状岩壁の大ハング帯を偵察するには絶好のルートである。内容もフリーと人工が適度に混じり、中級向きのルートである。(記・木村 智)

●ルンゼ状岩壁中央ルート

一九七九年八月十三日

パーティー 木村智、田口健二

二ノ沢の岩場初見参のきょうは、アプローチの滝の登攀に手こずり、特に三〇桁の滑滝では、左岸の脆くて草付混じりのフェイスに入って苦戦し、やっとのことで落口上へ達した。そこからガラガラ沢をどん詰まりまで行くと、水が岩壁の基部から湧き出ている。ここで水を飲んで頭上を見やるが、スラブがずっと上に続いていて登る気はせず、基部に沿って左へ左へと巻いて行くと明瞭なルンゼが現れ、フリーで登れそうな感じがしたので試登と決定。一P、水に磨かれて固いルンゼを快適にザイルを延ばすようにザイルが

二P、ビレイ点からルンゼ通しに上

